

【余計なプロローグ】

いきなりの自分語りで本当に恐縮ですが。始めは、この舞台を観に行かないつもりでいました。昨年、演出のタニノクロウ氏が手掛けて、同じオーバードホールで上演された「地獄谷温泉 無明ノ宿」を観ていましたが、それよりは、第一印象で特に惹かれなかったからです。さらに、チケットが発売になって随分経ってから、ふとこの劇の存在を思い出したのも大きかったです。チケット争奪戦に出遅れたから、もう良い席は残ってないだろう。だったら良いや。今回は縁がない。そんなテンションの低さだったので、去年の秋頃にどこかで貰ってきた公演チラシも、既に捨ててしまっていました。

しかし、思いがけず風向きが変わったのは、この劇を見てレビューを書いてみないかという、レビュー講座の募集を、フェイスブックで見つけてからでした。かねてから、自分の言葉で文章を綴ってみたいと考えていた私はピンと来て、募集要項を何度も読んで、迷った末に、あとは直観で申し込むことに。現役のプロから、文章の書き方を、こんな地方の富山で教われるなんて（しかも無料！）、めったにないことだと思いました。寝る直前に思い立ったため、夜中にパジャマ姿でひとり喜んでいました。つまり、レビュー講座に出たいがために、「ダークマスター」のチケットを買うという、いささか本末転倒な流れになったわけです（余談ですが、この公演のチケットは全席自由であり、既に見づらい席しか残っていないという心配は、杞憂に終わりました）。家族を起こさないように階下に降り、チケットを手配する為のスマホを握りながら、勝手に胸は高鳴って、静かに小躍りしたい気分だったことを覚えています。テンション、めっちゃ上がっています。

第一回目のレビュー講座は、思っていたよりわかりやすくあっという間の2時間でした。言葉に対するイメージや単語が、自分の中からあふれ出してくる感覚を、少し掴ませてもらえたと思います。単純に、すごく楽しかったです。特に共感したのは、「 temple撲滅」という言葉。私自身、よく言われます。お世話になっている方に、メールで悩みを相談する時、「うまくまとめようとし過ぎ」「レポートはいらない」「綺麗にパッケージしなくていい」「本音が見えてこない」と、散々な言われようです。もうそのことを思い出しただけで、自分を省みる機会をいただけただけで、このレビュー講座に出て大・大・大正解だと思いました。

観劇当日は開場10分前に入口につくと、全席自由のためか既に長い行列が出来ていて、女子高生と思われる制服姿もありましたが。大方30代から上の年代が客層かな、と推測しました。今回も「地獄谷温泉」の時と同様、チケットレーンを抜けてホールに向かうと、広々とした客席を後方から入り、ステージに上がって上手の舞台袖から裏へ回ります。薄暗い通路の先に、舞台上特設シアターが作られていました。

座席にはイヤホンと注意書きが置かれていました。シンポジウムの同時通訳を聞くためにイヤホンを使ったことはありますが、観劇では初めてです。劇の途中から使用すると

こと。音の確認をして、スタッフの説明が進むたびに、否が応にも期待が膨らんでいきます。

【マスターの枯れた魅力と存在感】

聞き慣れた、市電の通る重厚な音。車の往来。歩行者信号の音も鳴っていたでしょうか。幕が上がると、夕暮れ時の古びた定食屋に、飲んだくれた初老の男。テレビのニュースは、この店がある中心商店街が、高級マンションや最先端の複合施設へと再開発されていく様子を告げていました。

男は、厳つい風貌に少しくぐもった声の持ち主で、富山弁独特のきつい口調と迫力には、初め、同郷者としての気恥ずかしさと笑いがこみ上げました。しかし、若者を不気味に巧みに操っていく様には、言いようのない説得力がありました。「よそ者には分かん」と表面上は突き放しつつ、「理解してほしい、何とかしてほしい」という本音が透けて見えてきます。元々の偏屈さに老いも相まって、余計に人を遠ざけているように映りました。途中から声のみの登場となっても、飴と鞭の使い分けで、抗えない危険な魅力を感じさせます。タイトルロールを演じたのは、実際に喫茶店を営む六渡達郎さんです。どこかくたびれた佇まい、本職ならではの慣れた調理、演技経験のなさが逆に本物らしい！とかなり心を掴まれました。この人なしでは今回の舞台は成り立たなかったし、よくぞこんなぴったりの人がいたもんだ、と思わず唸ってしまいました。素晴らしかったです。

【今どきの若者】

自分探し中の若者が、定食屋にフラリと現れます。場の空気に合わせて意見を変え、ペラペラと調子よく喋るけれど、底が浅く何とも頼りありません（本音では金沢に行きたかった）。東京で今、若者向けに映し出される田舎への憧憬は、「カッコいいし、絵になるから」というファッション感覚なんだろうか。反対に地方も、そのイメージを利用しながら、観光客誘致や移住促進を進めているけれど、東京に憧れて田舎を出ていく地方出身者は後を絶ちません。以前、東京近郊に住み、外から富山を眺めたことのある身からすると、都会っ子と田舎者が互いの土地に憧れを持つ気持ちは、それぞれ理解できる場所があります。

得体の知れない役目をマスターから押し付けられても、「お前なら出来る」と根拠のない励ましをもらい、金をちらつかせられたら、すぐその気になってしまう若者。初めて降りたった県の、初めて立ち寄った定食屋の店で、明日からお前ひとりで（すべての指示はマスターからイヤホンで伝えられるにせよ）厨房に立て、という無茶振りを、受けてしまえる度胸というか、世間知らずさ。それもゲーム感覚だから、若者にとっては軽いノリでしかないのです。観ているこちらとしては、既に不安しかありません（いえ、ここからが本題で面白いところなのですが）。

何処を目指し、何を目的に生きてらよいか指針もない中で、ただこの瞬間「すごい」「正

しい」と言ってもらえたら、それで安心できる。その為なら何でも出来てしまうのは、本当に短絡的で危うい。いいね！をもらって手っ取り早く満足したい SNS の世界が、頭をよぎりました。ただ、私自分にも「人に認めてもらいたい」欲望は強くあり、思い出したくもないですが、「自己実現」だと気を高ぶらせて、到底続けるのが無理な高額セミナーに申し込み、貴重なお金をドブに捨てたことがあります。この若者は、過去の自分に大いに重なるところがありました。この若者ほどのめり込むことは出来ず、フットワークも軽くななく、失ったのがお金だけで済んだのが、私にとっては幸いだったと今は思えますが。「怪しすぎる、なぜ信じたの」という周りの意見はもったものだけど、当の本人は目が覚めるきっかけがあるまで、生まれ変わる喜びにワクワクしながら、突っ走ってしまうのです。自己承認の欲求、それはとても根深く厄介なものだと、経験した立場からは思います。

料理も接客も出来ない都会の若者が、定食屋を繁盛させ自信を得ることと引き換えに、人格が乗っ取られて腹黒い「マスター」へと生まれ変わっていくのが、観ている側の怖さですが、外野としてとても面白がっている自分にも気づきます。自分に細々と指示してくるマスターや、自分のやることを信じて疑わない「真っすぐなヤバさ」を、善雄善雄さんがごく自然に演じていました。言動が軽くフワフワした若者が、マスターによって書き換えられていき、方言に染まり、それまでやらなかったはずの酒と煙草にも手を出して。深みにはまって引き返せなくなる終盤は、特にハラハラが募りました。

【ドナドナ】

暗幕に映し出される「生まれ変わる」ための言葉が、かすれた大文字で目の前に広がって、気味の悪さと不安定さを醸し出していました。哀愁漂う「ドナドナ」の歌に乗せて、ぐいぐい脳に刷り込まれていきます。耳の記憶を頼りに youtube で調べると、Joan Baez という女性歌手のバージョンだったようです。子牛の運命は、ラスト、地上げ屋に一人殴り込みをかける（命を懸けることになる）若者に重なるのか、老いて孤独なマスターの空虚な身の上に重ね合わせるのか、どちらでしょうか。

【焼野原】

「1939年ちゃ、何の年よ？戦争はじまったがやろ」「今も周り見てみれよ、焼野原よ」。おぼろげですが、そんなセリフだったように記憶しています。さびれてシャッター通りとなった商店街をマスターが嘆いて、人も店も消失した「焼野原」に例えた時、かなりドキッとさせられました。あまりに大げさな、しかし強烈な言葉です。私自身、富山大空襲についてはよく知らず、中心商店街が、戦後どう復興していったのかも知りません。さらに、中央通りや総曲輪通りが賑わっていた時代を、ギリギリ体感している世代でもあります。もっと個人的なことを言うと、中心商店街が寂しくなってから、仕事の関係で少し街に出入りしていた時期がありました。中心市街地の活性化という名目で、そこに店を構えるオーナーの方々と、直に触れあう機会があったのです。富山に居ながらにして歴史を何も知

らない。また仕事でも、ほどなく退職してしまい、商店街の盛り上げには何の役にも立てなかった。何か自分の中に負い目のような、苦い記憶があって、動揺したのかもしれない。

しかし、マスターの恨みや憎しみ、独善的な思い込みのようなものが、彼自身を蝕んで、狂気じみた若者支配に走らせたのか？とも感じました。県外から来た大型商業施設に、賑わいを奪われた悔しさ。客の来ない苛立ち。立ち退くまで終わらない地上げ屋からの脅迫。老い。絶望。救いはやって来ない。マスターも助けを求めない。だから、自分でできる限りのことをやるしかない。それは、店を繁盛させて、街に活気を取り戻すことだけか。世間知らずな若者をそそのかして服従させ、若者にとっての救世主になることだったのか。はたまた、地上げ屋への復讐だったのでしょうか。マスターの胸中は、実際にはもっと複雑なのかもしれません。決して内面に抱えているものは、単純明快ではないと感じました。

【マスターと若者の関係性】

同じ味と店舗にも関わらず、マスターが若者に代わっただけで、あっさり繁盛店になることの妙。最後の最後で、マスターは、思いのほか成功してしまった若者への戸惑いや嫉妬、若さそのものへ羨望も滲ませていたように感じました。店主を入れ替えながら、この定食屋だけは続いていくのだろう。と予感させる幕切れでしたが、果たしてマスターの野望は叶うのでしょうか。おそらく、真意がどこにあるにせよ、マスターに本当の満足、心の平穏のようなものは訪れないだろう、ということだけは感じます。そして、マスター自身もそれを分かっているのではないのでしょうか。誰にも顧みられない絶望の片隅で、権力と暴力で弱いものを従わせ、支配者は何とか自分のプライドを保ち（かなり常軌は逸しているけれど）、支配されるものは徹底的に搾取され、身も心も削り取られてゆく。そう考えると、家庭でも、学校でも、職場でも、どこでも似たような状況は見られるわけで、実際に痛ましい事件はたくさん起きているのが現実だ、と気づかされます。何とも憂鬱な気持ちになります。

ふと思うのは、途中からでも良いので、普通にマスターと若者の二人でキッチンに立ち、ああでもないこうでもないとし身のやり取りをしながら、アイデアを出し合いながら店を切り盛りしていけば、どんな未来になったのだろう、ということ（地上げ屋に対する態度は未知数ながら）。マスターと若者二人の関係が、親子のような温かい間柄に変わった可能性はないだろうか、想像を巡らせてみます。しかし、実際にマスターは若者に歩み寄ろうとはしなかった（自分の手は決して汚したくないからか）。若者も、マスターを探しに2階に上がろうとはしなかった（ただ一人でお客さんに褒められることが、心地よかったからだろうか）。時々、若者がマスターの体調を案じたり、マスターが若者に彼女とデートに行けと促したり、若者が出来ないことのフォローもするけれど、お互いに、お互いを利用する関係以上にはならない。そこに、マスターと若者の、強すぎる自己愛というか、絶対的な壁というか、深い心の闇を感じてしまいます。どうすれば良かったのだろう。

【平成の30年間と、その終わり際に観るこの作品】

遠隔指示で手玉に取られるのが若者で、マスターは絶対的権力者という構図は、明らかに「洗脳＝オウム」の図式だと感じました。また、自分の中で「中心商店街」という言葉の意味が、平成の30年あまりで、もはや「廃れ寂れた場所」に完全に変わってしまったことにも気づかされます。それに加えて、「富山の交番」という響きにも、胸がざわついた自分がありました。もはや「交番」から喚起されるイメージも、私の中で悲痛なものに変わってしまったことに、やり切れない思いがします。平成の初期に暴走したオウムと、平成の終わりに身近で起きた交番襲撃の記憶が交錯してきます。理不尽な暴力が、罪のない人々に向けて残酷に振るわれた衝撃。ニュースで眺めるだけだった凶悪事件が、自分の街で起こりうることの焦燥感。劇中のセリフに「戦争、焼野原」という言葉が登場することによって、それは、世の中すべての無責任な権力者たちと翻弄される下層の民、ひどく荒廃する人々の内面、にまでイメージが膨らみました。

富山で失われていくものと、根強く変わらないものが、タニノ氏のフィルターを通してちりばめられている作品のように感じます。都会では既に時代遅れのペッパーロボット（結局、ピンチでは役に立たない）。一見、和気藹々なようで、自分のことにしか関心がない定食屋の面々。結局、金沢。最後には、東京。富山を散々disりつつ、それでも富山を愛する気持ち。便利さと利益を優先し、物を持つことを尊び、面倒くさい人間関係は表面上のなあなあにとどめた結果、でしょうか。どこか虚しいような、「こんなはずじゃなかった」という気がしてしまいます。決して、「心の豊かさに近づいたわけではない」という現実を直視すべきなんだなあ、いま強く感じています。

【立山ライス】

劇中に登場する定食屋名物のオムライス「立山ライス」は、舞台上で実際に炎と音を立て、料理番組以上に臨場感ある映像で、出来上がりまでの様子を伝えてくれました。さらには、香ばしいステーキやケチャップライスの匂いもそのまま鼻に届き、素直に食欲を掻き立てられたのです。食べたいー！！観劇の翌日、劇とレストランの特別コラボ企画で「立山ライス」を出している洋食屋まで、さっそく足を運んでみました。濃厚なホワイトソースと卵はボリューム満点で、とにかくお腹いっぱいになり、大満足。欲を言えば、中央通りか総曲輪通りのどこかに陣取り、現在の空気を感じながら、昔の賑わいを思い出しながら、味わってみたかったなあ、とぼつりと感じたのでした。

最後に。私はこのレビューを、舞台を見たことのない、30代～40代の富山に住む女性に向けて書いたつもりです。舞台の魅力は、役者も観客も同じ時間と空間を生きていると実感できること。二つと同じ内容を繰り返せないこと。さらには、テレビや映画では語れないタブーのようなものを、思い切って表現できること、だと思えます。またまた「地獄谷温泉」

を例に出しますが、異形の者への好奇心や偏見を直球で描いていたし、男女ともに糸まとわぬ（本当にすっぽんぽん！）混浴シーンが何度も出てきたのが、単純に衝撃的でした。こんな表現して良いの！？ってすごい自由度を感じたし、全裸だからこそその開放感(?)や生々しい表現には、妙な爽快感、解毒作用すら感じました。ネットでの炎上を恐れ、テレビが非常に窮屈そうに感じる中、「舞台はまだ表現の自由があるんだわねえ」と希望のようなものを感じて安堵したりして（別に自分は舞台クリエイターでも何でもないけれど）。のびのびとした発想が許されて、想像力を掻き立てられて、とっておきの体験ができる舞台鑑賞、本当におすすめです。絶対に、SNSでは伝えられない体験が、そこにはある！！

今のうちに謝っておきます。徳永さん、長く書きすぎてごめんなさい。でも、すっきりしました。ありがとうございました。以上です。

E. T (富山県富山市)